

# 白氏文集 四十一 琵琶行 (四)

加藤淳平

北の黄河溪谷より發したる文化的中心の、後代に南の長江岸に移れるが、漢土の歴史なり。唐代は、皇都は西都長安、東都洛陽、何れも黄河沿岸なれば、長江岸は未だ中央より隔たりたる僻遠の地なりき。白樂天の如き、華の都より、斯かる僻遠の地に左遷せられ來たる人、豈「天涯淪落の人」ならざらんや。

## 琵琶行 (四)

## 琵琶行 (四)

鈿頭雲篋擊節碎  
血色羅裙翻酒汗

鈿頭の雲篋 節を撃ちて碎け  
血色の羅裙 酒を翻へして汗る

今年歡笑復明年

今年の歡笑 復た明年

秋月春風等閑度

秋月 春風 等閑に度る

弟走從軍阿姨死

弟は走りて軍に従ひ 阿姨は死す

暮去朝來顏色故

暮去<sup>ゆふへ</sup> 朝來<sup>あした</sup>たり 顏色<sup>いろど</sup>故びぬ

門前冷落鞍馬稀

門前は冷落して 鞍馬稀れに

老大嫁作商人婦

老大嫁して 商人の婦<sup>つま</sup>となる

商人重利輕別離

商人は利を重んじ 別離を輕んず

前月浮梁買茶去

前月 浮梁に 茶を買ひに去る

去來江口守空船

去りて來<sup>このかた</sup> 江口に 空船を守る

遠船月明江水寒

船を遠<sup>めく</sup>る月は明るく 江水寒し

夜深忽夢少年事

夜深<sup>ふ</sup>くれば 忽ち夢む 少年の事

夢啼粧淚紅闌干

夢に啼けば 粧淚<sup>あか</sup>紅く 闌干<sup>らんかん</sup>たりと

我聞琵琶已歎息

我琵琶を聞きて 已に歎息す

又聞此語重唧唧

又此の語を聞きて 重ねて唧唧<sup>せきせき</sup>

同是天涯淪落人

同じく是 天涯淪落の人

相逢何必曾相識

相逢ふ 何ぞ必ずしも 曾ての相識なるべき

(大意) (女の言葉の続き) 琵琶を弾く螺鈿の飾りのばちは、長年拍子を弾じて居るうちに碎け、血の色の薄絹のスカートは、酒をひっくりかへして汚れてしまひました。そんなことは氣にならないまま、今年、又明年と笑ひ明かして居りました。さうしてゐるうちにいつの間にか、秋の月の夜々も春のそよ風の日々も過ぎ、弟は家を出て兵隊になり、養母は亡くなり、一夜が明け、又朝が來てゐるうちに、容色は衰えて參ります。曾ては人が集まつた家の門前は閑散として、鞍を置いた馬が訪れて來ることは稀になり、年を取つた私は嫁して商人の妻となりました。商人は儲けには熱心でも、妻と別れることは氣にかけません。私をここに放置して、先月浮梁に茶を買ひに出掛けて行きました。夫が去つて以來、私はこの長江のほとりで、一人きりで船を守つて居ります。船とその周辺を照らす月は明るく、長江の水は冷たうございます。夜が更けるといつも夢見るのは、若いころのこと。夢の中で泣けば、化粧をした顔に、紅色の涙がしとどに流れます」。私(白樂天)は女の奏でる琵琶の音に已に歎息したが、また

この言葉を聞いて、唧唧たる思ひがもう一度迫つて來た。この女も私も共に落ちぶれて、都から遠く離れた僻遠の地に流されて來た者である。ここで逢つたからには、必ずしも昔知つてゐた者同士でなくともよいではないか。

(平成三十一年四月二日受附)